
 書 評

James A. Weisheipl: *Friar Thomas d' Aquino. His
Life, Thought and Works*, Doubleday & Co.
New York, 1974. xi+464.

稲垣良典

トマスの生涯、思想、著作について比較的詳しくのべた最近の入門書としては Vernon J. Bourke, *Aquinas' Search for Wisdom*, Bruce, Milwaukee, 1965 があるが、本書はその後の研究成果も精力的に参照し、トマス死去700年を記念して出版されたものである。著作のワイスハイプル神父はドミニコ会員で現在トロントの中世研究所の中世科学史教授の職にあり、トマス研究に関するもののほか、科学史の領域でも業績をあげている。筆者は1974年4月にローマおよびナポリで開催されたトマス記念国際学会で著者と話しあう機会があったが、その際著者は本書のための歴大な準備について語り、かつその成果について並々ならぬ自信の程を示していた。

本書の内容は七つの章からなり、それぞれの章において出生からドミニコ会入会セントンチアリスまで、「命題論集講師」としての修業時代、第1回パリ大学教授時代、イタリア時代(1)、および(2)、第2回パリ大学教授時代、ナポリ帰郷から死去までの時期をとりあげ、資料によって確定もしくはかなり確実に推定できるかぎりにおいて、トマスの活動を詳しくたどり、思想の発展を簡潔にあとづけ、それぞれの時期の主要な著作についてかなり詳細な紹介を行っている。筆者は序言で、本書を書くに際して第一に意図したのは、自分が30年以上も前にトマス研究を始めた時に読んでいたらよかった、そうした種類の書物を書くことであった、とのべているが、じっさいに本書は一般の読者のためのトマス紹介の書というよりは、トマス研究に志す者のための現在のトマス研究の見取り図という性格が強いように思われる。以下、著者が様々な資料、見解を検討した上で、自分の見解をのべている箇所のみを、興味深

と思われるものをえらんで紹介しよう。

トマスが家族の反対に打勝ってドミニコ会入会を果たした1245年からアルベルトゥスの下でケルンにおいて学び始めるまでの期間については資料の空白があるが、この期間トマスはアルベルトゥスの下でパリ大学において学んだ、人文学部で倫理学を学んだ（ゴーティエ説）などの推測がなされているが、著者はトマスがこの時期に修練期をすませたのだと主張する。また52年にパリ大学神学部教授候補者としてケルンからパリに移ったさい、トマスは現職の教授の下で聖書の講義を行ったのではなく、直ちに命題論集の講義を開始した、というのが著者の見解である。その理由は、ドミニコ会員がパリ大学の神学部教授候補者としてパリに赴く際には、すでに聖書講義の経験を有するのが通例だというものであり、したがって「ドミニコ会員にしてパリ大学に（神学部教授候補者として）来た者にして聖書について簡略的に（教授ではなく、講師が行う聖書講義を指す言葉）講義した者はいない」と著者はのべている。これらの見解は著者自身がドミニコ会員であることと何らかのかかわりがあるように思われる。

トマスのパリ大学における教授就任講演^{フリントボック}として有名なものほかに、それよりもやや長い、いわゆる第二の就任講演なるものがあるが、これはマンドネ以来、トマスが聖書講師になったときの就任講演であるとされてきた。しかし、著者はトマスがパリ大学で聖書講師として講義を行った事実はないこと、さらに教授就任式（教授資格授与式）の次第を詳しく調べることによって、「第二の就任講演」は実は就任式後の最初の講義の記録であると主張する。さらに、『任意討論集』第七の第六および第七問題は、就任式において行われるのが慣例であった四つの討論のうちの第二および第三にあたるものと推定している。

マルク神父が、1967年に発表された論文（『護教大全』序文）で、『護教大全』の著作年代を従来の通説よりもほぼ10年後の1269—73年と主張して話題を呼んだことは周知の通りであるが、著者はマルク論文の詳しい検討は別の機会に譲りつつも、マルク神父の主張する時期に『護教大全』を著述することは肉体的に不可能であった、としてその主張を斥けている。すなわち第2回パリ大学教授時代にトマスは『神学大全』第二部の全体、アリストテレスの諸著作の註解、托鉢修道会弁護およびアヴェロイス派批判のための論争、その他の著作活動を遂行しており——大学教

授としての聖書講義、討論主宰、説教の職務を別にして——とうていそこに『護教大全』の著作を入れこむことは不可能だというのである。さらにルッカのトロメオの証言（「教皇ウルバノ4世の在位中〔1261—64〕に異教徒を論駁する書物を書いた」）も軽々しく無視できない、と著者は主張する。

つぎに、教皇ウルバノ4世の宮廷におけるトマスと翻訳家ギョーム・ド・モルベカとのいわゆる協力関係——ギョームは「トマス修道士の要請によって」*ad instantiam Fratris Thomae* アリストテレスの著作を翻訳した——なるものについて、著者はそのような協力関係は存在しなかったことを指摘する。そもそもギョームはウルバノ4世の宮廷にいたことはないのである。ただし、1267年頃、教皇クレメンス4世の宮廷があったヴィテルボでこの二人が1年程一緒であった時期があり、トマスがギョームの翻訳を一番早く利用できる立場にいたであろうことは推定される。したがって、トマスのアリストテレス研究、あるいはアリストテレス註解の便をはかるために、教皇ウルバノ4世のきもいりでギョームが宮廷に呼びよせられ、翻訳に従事したという伝説は全く根拠がない、というのが著者の結論である。

またトマスがパリ大学からイタリアに呼びもどされて、教皇たちの宮廷で教えた、と伝えられていることについて、これがトマスにとって何か栄誉ないし昇進を意味したかのように受けとるのは誤解であって、教皇の宮廷学校で教えるということは、若い、初心者たる聖職者たちの教育にあたることにはほかならない、と著者は主張する。またイタリア時代にドミニコ会の学校で哲学を教えた、あるいはアリストテレスの註解に従事した、との通説についても、著者はそれを全面的に否定する。

著者はトマスのアリストテレス註解についてはきわめて明確な見解をとっている。すなわち、著者によるとトマスがそれらの註解の著作に従事したのは第2回パリ大学教授時代およびそれ以後のことであり、その動機はもっぱら使徒職的な性格のものであった。すなわち、托鉢修道会弁護のためにパリ大学に呼びもどされたトマスは、そこでブラバンのシゲルスを指導者とするアヴェロエス派の問題に直面するのであるが、なによりかれが心を痛めたのは人文学派の若い教授達の苦境であった。すなわち、人文学部ではアリストテレスを教えなければならないが、アリストテレス解釈のために拠るべき著作としてはアヴェロエスの註解のほかには何もなく、このため若い教授達はアヴェロエスの影響下に入らざるをえなかったのである。この

ため、トマスはアリストテレスが言っていることと、その真意とを説きあかしてかれらとその苦境から救い出さなければならない、という強い使徒的な使命感にとりつかれた、というのが著者の見解である。

著者によると、トマスの著作の全体が、おそらくは使徒的な奉仕の熱情あるいは精神から出るものと解釈さるべきものであり、第一回および第二回のパリ大学教授時代にはさまれた、約10年間のイタリア時代の著作においてとくにこの性格が顕著に見られるという。他方、1269—70年頃、トマスの精神態度に顕著な変化が起っていることがエッシュマン、ゴージェ、ロットン、ラミレスなどの諸家によって指摘されているが、これも著者によると使徒的熱意のたかまりによるものとされている。

このように著者は一方において、トマスの信じ難いほどの多産性、測り知れぬほどの集中力の根底にあったと思われる、かれの全活動の深い動機あるいは原動力たる使徒的熱意を強調するが、他方伝記作者たちの証言や記録について、時としてきわめて平凡な解釈をこころみている。たとえば、トマスのドミニコ会入りの決心を動揺させるために家族が美女を備ってかれを誘惑させたという伝説に関して、著者はこれをありうべき話だとして肯定した上で、トマスがとったと伝えられている行動については、通常の若者の疲労といらだち、などによってそれらを説明している。またトマスが1273年12月6日以降、一切の著作を停止し、しばしば一種の忘我状態にあったと伝えられていることについても、その原因とされる神秘的啓示は、長年の心身の酷使による脳の損傷、身体的および情緒的能力の破壊を機会に授けられたものではないか、と推定している。さらにトマスの死因については、旅行中に道につき出していた樹木の枝で頭を強く打った際の脳内出血が致命傷となったのではないか、という。また、トマスが1259年にパリ大学から「何らかの理由」でイタリアに呼びもどされたという伝記作者たちの表現について、すでに自分の後任がきまって、さしあたりパリ大学にとどまる理由がなくなった、という以外に理由はなく、いずれにしても修道会の上長たちは何故だかわからないが会員たちをいつでも「緊急に」呼びつけるものだ、とユーモラスにのべている。

この他、本書の内容で興味を感じた点は色々あるが、トマスの神学教授としての活動のなかで聖書解釈のしめる中心的地位、および1259—68年のイタリア時期にト

マスが行った徹底的なギリシア教父神学の研究を通じて、かれの神学、ひいてはカトリック神学における大きな転機がもたらされた、という指摘などをその例として記しておこう。

著者は第一章の冒頭で、19世紀後半以来のいわゆるネオ・トミズム運動のなかで、トマスの詳細な歴史的研究に従事する歴史家と思弁的な「トミスト」との間に不幸な分離が起り、これが今日におけるトミズムの衰退を招いた、とのべている。トマスの教説の十分な理解のためにはこれら二つのアプローチのいずれをも欠いてはならないが、著者によるとそれらは相互排他的ではなく、むしろトマスの教説は、それらを厳密に歴史的コンテクストのなかにおいて理解するときのみ、その超歴史的な意義がはっきりになる、というのである。さらに著者は序言において、つぎの2、30年の間にトマス研究への新たな関心のたかまがりが見られるであろうが、それはカトリックの研究施設においてではなく、世俗の大学や研究者の間において起るであろう、と予測する。いずれにせよ、著者は本書においてトマス研究に関心を有する者にたいして、さきにものべたように、現在のトマス研究の問題領域の見取り図ともいべきものを提示しており、そこに本書の有用さがあると思う。

井筒俊彦著：イスラーム思想史

昭和50年11月 岩波書店 362頁

柏木英彦

コーランの邦訳を公刊されて後、井筒俊彦教授はカナダ、マックギル大学イスラーム学研究所にあって画期的な仕事を続々と公にされてきたが、昨年アンリ・コルバン、レイモンド・クリバンスキーのような第一級の学者とともにイラン王立アカデミー会員に就任され、ペルシャ哲学、東西比較思想の研究に専念されている。

この間、教授はその成果をすべて英文で発表されてきた。イスラーム思想史に関